連載 キャリアセンター通信

首都大学東京における キャリア形成支援

首都大学東京　学生サポートセンター
キャリア支援課長
関　幸彦

「大都市における人間社会の理想像の追求」を理念に掲げる首都大学東京は、東京都立大学などの都立四大学が統合して2005年に誕生した。英国の教育専門誌「TIMES」の最新の「世界大学ランキング」では、日本の大学のうち7位にランクイン、世界1万5,000校の大学の中では266位と、国際的にも高く評価されている。

現場体験型インターンシップ

本学の最大の特徴は、リベラルアーツ（教養教育）重視のユニークなカリキュラムであり、大学の学びはもちろんのこと、社会を生き抜く力を身につける構成となっている。

そのような中で、キャリア形成支援の要であり起点となるのが、「現場体験型インターンシップ（単位認定）」である。これは1年次から履修ができ、都や市区などの地方自治体や民間企業などへの派遣体験を通じて、大学生活での学びの意義を確認することが最大の目的である。すなわち、入学後初めての夏季休暇という最も早い段階から、社会の実際に直接触れ、実体験することで、大学でこれから学んでいく動機づけと使命感を自ら得るのが狙いなのである。

学生は、豊富なオリジナル教材やガイダンス授業に沿って、実習先の実態についてさまざまな手段を創意工夫して調べ、自らの実習目標を独自に設定する。数度にわたる仲間とのグループワークを交えて目標達成へのプロセスを見直したり、ビジネスマナーを磨くなど、しっかりと準備を重ねたうえで実習現場に臨む。また実習後のレポートも冊子にまとめられ、他の学生の成果報告をも共有した中で、大学生活を通じてその後の振り返りに活用される。

大学で学ぶ意義と目的を確認して

実習後の体験談では、「1年生の早い段階で仕事の現場を体験することは、その経験を活かして今後の大学生活の目的意識を明確にして、自分の可能性を広げることができるという大きなメリットがあると思う」「実習先の方から『自分が目指す進路に合った努力が不可欠』とのアドバイスをもらった。現在はまだ進路が明確でないので、早く自分の目指す方向を固め、しっかりと目標をもった大学生活を送れるようにしたい」など、実習成果を裏づけるものがほとんどである。

全国的に見ると、単位認定を行う授業科目としてのインターンシップについて、大学単位での実施率は70％近くに達するが、個人単位としての実際の学生参加率は2％にも届いていないのが厳しい現状である。しかしながら本学の「現場体験型インターンシップ」は、毎年新入生の約25％以上が履修する、本学学生のキャリア形成支援に不可欠な存在として定着している。

自発的な適職発見の実現を支援

このように、入学直後から「将来の進路拡大に繋がる『学び』の重要性の気づき」を支援の中心に据え、実際の就職活動時は「専門と適性を活かした自発的な適職発見」を実現させるための多様な側面の支援を行う。そして学部4年間あるいは修士を含めた6年間の長期的視野で、学生の職業的未来の準備・形成を促す「キャリア形成支援」を実現し、本学が目指す学力・能力に基づいた就業力の醸成を図っている。

世間一般の傾向で言えば、多くの学生は、進路に不安をもちつつも社会と距離をおき、自分を見つめ、真剣に将来を考えることが少ないまま年次を重ね、就職活動の時期を迎える。そして就職活動が始まって社会の厳しい現実に直面し、初めてそのハードルの高さと学生生活の重要さに遅まきながら気づき、やり直しのできない後悔から悩み悶え苦しむ学生も少なくない。

このような状況を打破させるためにも、「就職活動時期の後ろ倒し」の主旨を大学界として重く受け止め、「意識して」「計画的に」「目標をもって」充実した大学生活を実現させることこそが、大学界全体としての重要な使命であると強く認識している。